

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## A Study of Dazai Osamu's Megami : The Universality of Parody Literature

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yoshioka, Mao メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000408">https://doi.org/10.57529/00000408</a>

# 太宰治「女神」論

— パロディ文学の普遍性 —

## 一、はじめに

「女神」（日本小説）昭二・五）は、言及されることの少ない小説である。数少ない先行論において、奥出健<sup>1</sup>は本作の「重要な三側面」として、①細田氏の発言について、「戦争にみた男性論理の不毛の反省と今後は融和する男女の世界が必要、という理論は作者の願う世界」だったこと、②この発言が「満洲で苦勞の結果の発狂」として提示されていることについて、「作者はずでに『正常』の世界に安住している自分を含めた戦後世

## 吉岡真緒

界をすどく批判している」こと、③結末の夫婦の会話における妻の発言について、「狂気よりも作者の生活状態の方が罪が重く、夫婦の共生感覚を感じ得ぬ妻から作者への『不信』の表示」であり、ここに至って「狂人」・細田氏の言葉は「作者の『正常』世界の念願と変化」し、そこに「桜桃」（「世界」昭二・五）等につながる「夫婦の融和を願いながら無頼の世界へ放浪しなければならなかった複雑な戦後太宰の精神風景のありよう」が見られることを挙げる。これらの指摘は、最終的に実人生に依拠した作家太宰の「精神風景」を描き出しながらも、戦後を背景にした夫婦の関係性に焦点を当てた説と言えよう。

細田氏の言動について「狂人」と見なす「私」(男・夫)と、問題視せず受容あるいは肯定的に受け止める二人の女(妻)達との対置に「女という生き物の底の方には、男にはみられない、どんな現実をも引き受けて生き抜いてゆくこうした強さが備わっている、男はけっしてそれに勝てない」という太宰の「女性観」を見出だす小浜逸郎の見解もまた、こうした問題意識を引き継いでいる。

「私」の妻と細田氏の妻とは、「私」を「あわて」させ、「戸惑」わせ、「眉間を割られた気持」にさせる、言ってみれば、「私」の語りによって構築されたそれまでの物語の枠組みをつき崩す存在として配置されているため、そのあり方や関係性を問う視点は当然重視されよう。一方で、言葉によって構築された小説に、太宰治の「精神風景」や太宰治の「女性観」といった太宰治の内面を見出だす態度は、冒頭で示される「私」の来歴(故郷の津軽で、約一年三箇月間、所謂疎開生活をして、さうして昨年の十一月に、また東京へ舞ひ戻つて来て)や語り手「私」が著者名と同じ「太宰」であることの明示に着目してのものと思われるが、そうして見出された「太宰治」が、言葉からイメージ化されたフィクションな主体であることは意識する必要があるだろう。物語言説の言表者である「私」は物語内容の登場

人物であり、「私」と「太宰治」とを接続させる物語切片は「女神」テクストという全体に吸収されるのだから。さしあたっては「私」を「太宰治」として設定する言説が、どのようなコンテクストに置かれているかに着目する必要がある。

テクストの冒頭に置かれているのは「れいの、聖光尊といかいふひとの騒ぎの、すこし前に、あれとやや似た事件が、私の身辺に於いても起つた」という一文である。これから語り出される物語について自己言及するこの前置きは、「私」と同じように聞き手(読み手)も、これから語ろうとする出来事を「れいの、聖光尊とかいふひとの騒ぎ」に「やや似た事件」として読んでほしいという依頼であり、読者の心の中に「聖光尊」や「私」や「私の身辺におきた事件」についての考察や想像を生じさせる効果を前提とした働きかけであり、事件について「語ることにする虚構を制作する行為の遂行」をしつつ虚構への参入を促す、物語の入口である。「れいの、聖光尊とかいふひとの騒ぎ」が実際の事件であることから、その「すこし前」に起きた「やや似た事件」とする言明は、物語世界の時間を決定し、聖光尊をめぐる騒動をコード化し、コンテクスト化し、パラテクスト化する読まれ方の指示でもある。実際の事件が取り入れられてはいるが、読まれ方の指示それ自体が虚構化に他ならな

い。美知子夫人の『回想の太宰治』<sup>(6)</sup>によると、太宰は、購読していた「朝日新聞」を「細かく読む方」で、「新聞記事をよく作品にとり入れていた」という。問題はその取り入れ方すなわち語り方<sup>(7)</sup>ではないだろうか。

冒頭の一文によってパラテクスト化された当時の新聞記事によると、靈光尊、本名・長岡良子は、新宗教・靈宇の指導者である。天照大神の化身として、敗戦後のいわゆる「天皇の人間宣言」と同時に、自ら皇位について世界を救うのだとして靈光尊を称するにいたったという。神のお告げにより当時の暖冬現象を東京に起きる世直しの「天災地変」の予兆として流布させ、信者を引き連れて金沢に移って間もない昭和二十二年一月二一日に大量の食糧隠匿の疑いで教団幹部とともに逮捕、同月二三日に妄想性痴呆の診断により釈放された。逮捕前後にあたる昭和二十二年一月は紙面の多くに関連記事が見られ、世間の注目の高さ<sup>(8)</sup>がうかがえる。

靈光尊のコード化に着目した菅聡子は、靈光尊に自称天皇の系譜を見たうえで、「一見、同時代の『民主主義』言説を敷衍した、あるいはそれへの同調」として読み取られる細田氏の「狂気」の言葉は、それぞれの箇所においては「私」をいらつかせる以外にとくに意味を持たない世迷い言<sup>(9)</sup>として表層に現れ

るが、語り手「私」によってテクストの冒頭に配置された「靈光尊」の一語によって、そこに「散りばめられた」記号は「過去の帝国の欲望の痕跡」を内在させた「大日本帝国における神話の語り直し」を形成すると述べ、本作に「現在にいたるまでの〈戦後〉を貫く批評性」を見出だす。細田氏の発言に「戦時中を想起させる記号」を指摘し、「戦時中の『神』が占領下の日本でもなお生き続けることを表象している」と述べる金コンロンの説は、これを継承するものであろう。

靈光尊のコード化によって開かれる読解の一つが、菅によって明らかにされたことは論を俟たない。しかし「靈光尊といかふひとの騒ぎ」と「やや似た事件」としてずらず語り方は、この小説が靈光尊事件のパロディであることを示している。細田氏を「狂人」視する「私」は、靈光尊に冷ややかな眼差しを向けた同時代の言説そのものといえ、その「私」の語りによって構築された枠組みが二人の妻によってつき崩される物語内容において、パロディ化は同時代の言説にも及んでいる。「男女同権の同時代的言説は、実はかつての大日本帝国時代の国家主義的母性主義、そして天照大神を淵源とする神国日本の神話と枠組みを共有し得る」ことを「細田氏の〈狂気〉の言葉」は「暴いている」とする菅の指摘は本テクストが有する批判性を指摘

するものではあるが、そのような言葉を発する細田氏を「私」が「狂人」と見なしている点は重視したい。また、「正常」と「狂人」の枠組みが二人の妻によって脱構築されることについての批評性は改めて問う必要がある。この観点から、奥出（前掲）による②の指摘における満洲体験による発狂と「正常」の世界の対置によって現れる批判性も、最終的に「正常」と「狂気」の境は曖昧にされるため再検討する必要があるだろう。また、「狂人」・細田氏の言動を問題にしていけない細田氏の妻の態度に動揺し、細田家に「幸福な家庭の匂ひ」を嗅ぎ取る「私」についても再検討したい。プロット上、狂人の妻という自覚のない細田氏の妻の態度によって引き出される「私」の動揺やそれに続く「狂人の住んでゐる部屋とは思へない」家庭の叙述は、物語を転換する装置として機能しているからだ。

## 二、「動揺」という装置

冒頭の一文中に続くのは、「私」の来歴（故郷津軽での疎開生活を経て帰京し、細田氏の来訪を受ける）と、「私」が知る細田氏の来歴（①大戦前の生活②大戦がはじまってから満洲へ疎開）と人物評、「私」と細田氏の関係性（飲み相手だった細田

氏に大戦がはじまってから共に満洲へ疎開するよう誘われるが「私」は断り、満洲に渡った細田氏からの葉書を最後に付き合いは途絶える）を示す物語切片である。これらは、これから語られようとする「去年の暮れ」の細田氏との再会をめぐる出来事について聞き手（読み手）が聞く（読む）際を知っておいてほしい予備知識すなわち読まれ方の指示として、同じく読まれ方の指示である冒頭の一文中に接続している。そこに示されるのは過去（敗戦前）の細田氏と現在（敗戦後）の細田氏との落差と、「私」と細田氏との落差である。

「私」（太宰）という叙述は、当然のことながら著者名「太宰治」を想起させる。読者が現に読みつつある小説の作者名としてテクストの周縁に置かれているパラテクスト・「太宰治」と「私」とを接続させるこの叙述は、この小説が著者の体験であることを物語上の設定として示す。著者の体験という物語上の設定は「聖光尊」という言葉同様、テクストを同時代に開くとともに、「私」に著述家という属性を割り振ってしよう。この叙述は「故郷の津軽で、約一年三箇月間、所謂疎開生活をして、さうして昨年十一月に、また東京へ舞ひ戻つて」来たという津島修治と重なる来歴以上に、「私」が著述家であることが喚起する。細田氏もまた「大戦の前は、愛国悲詩、とてもい

つたやうな、おそろしくあまい詩を書いて売つたり、「ハイネの詩など訳して売つたり」と売文を生業とした経歴を持つことから、「私」と細田氏には、売文業と疎閑生活の後帰京という類似性がある。一方で、パラテキスト・「太宰治」がはっきりと示すように「私」が現在も著述を生業にしているのに対して、細田氏は大戦がはじまってからは売文業を放棄して満洲で出版社に勤め、それも敗戦によって当然失われている。また、「私」が疎閑したのは故郷の津軽であるのに対して、細田氏が疎閑したのは敗戦後さらなる惨状に見舞われ引き揚げも困難を極めた満洲である。類似性によつて際立つ内実の落差は、「大戦のまえ」・「大戦がはじまつて」という切れ目により、戦争がもたらす悲劇としての「狂人」・細田氏の悲劇性を高めていよう。それは相対的に、「大戦」や「敗戦」という切れ目とは無関係に現在も変わらず著述を生業とし、細田氏を「狂人」と見なす「私」の生活の安定と「正常」の強調となろう。細田家で「私」が経験する動揺や帰宅後の「眉間を割られた気持」はこうした枠組みの解体であり、安定なるものや正常なるものを対象化し反転させる装置として機能している。

とりわけ、細田家での「私」の動揺は重視される。なぜなら、この動揺が二行続けての改行による「わからない」／「少しも

わからない」という反復によつて強調され増大する思いとなつて、帰宅後、おそい夕ごはんを食べながら「けふの事件をこまかに家の者に告げた」という物語る行為を導き、その結果としての妻の言動が「私」の動揺をさらに深めるという局面を開くからだ。その結果「私」は「満洲で苦勞の結果」「発狂」したとされる細田氏にいらつきながらも同情する同情者という安定した位置から、「わからない」という不安定な位置へ移行することになる。移行するのは「私」の位置だけではない。

繰り返すが、物語は「れいの、靈光尊といかいふひとの騒ぎの、すこし前に、あれとやや似た事件が、私の身辺に於いても起つた」という一文から始まり、そこに「細田氏の突然の来訪は、その（東京の知人との再会）中でも最も印象の深いものであつた」という一節を含む私の来歴が接続されている。「靈光尊とかいふひとの騒ぎ」と細田氏とが結び付けられることによつて、「靈光尊」を知る読み手は「靈光尊」を心の片隅におきつつ、これから語り出される「細田氏の来訪」譚を読むことになり、「靈光尊」を知らない読み手は「細田氏の来訪」譚を「靈光尊とかいふひとの騒ぎ」のシニファイエとして読むこととなる。いずれにせよ、細田氏を焦点化する語り方といえよう。一方、先程述べた細田家での「私」の動揺は細田氏の妻に向けら

れており、帰宅後の「私」をさらに動揺させるのは「私」の妻の言葉である。新たな局面を開く装置である「私」の動揺が二人の妻によってもたらされていることは、語りによる焦点化の対象が細田氏から細田氏の妻へ、さらに「私」の妻へと移行したことを示している。

物語はある状態からある状態への移行を有する。「私」の位置や「私」の語りが焦点化する対象の移行を可能にするのが「私」の動揺であるならば、それはどのように示されるのであろうか。

### 三、「狂人」を形成するレトリック

いわゆる「天皇の人間宣言」とされる昭和二十一年元旦の天皇詔書が発せられた後、天皇を自称する者が次々と現れた。<sup>11</sup> そうしたなか、璽光尊が率いた慈宇教は、幹部に元横綱の双葉山と囲碁八段の呉清源がいたことから世間の注目を集めていた。とりわけ、璽光尊が新聞でしきりに報道されるわずか数ヶ月ほど前の昭和二十一年一月一九日に横綱引退・時津風襲名披露大相撲を行ったばかりの双葉山は、「奇跡の六九連勝」や優勝一二回という大記録を成し遂げた国民的スターのイメージが記憶に新しかったからであらうか、璽光尊がらみの報道では、しばし

ばその落差や入信の不可解が言及されている。<sup>12</sup> 「いやしくも知識人の彼に、このやうなあさましい不潔なたはごとをわめかせるに到らしめた」と、「知識人」としての属性と「あさましい不潔なたはごと」が結びついてしまう不可解と不愉快を示す「私」の叙述は、璽光尊について双葉山に言及する報道言説の焼き直しである。

「細田です。」

さう名乗られて、はじめて、あ、と氣附いたくらゐ、それほど細田氏の様子は変つてゐた。あのおしやれな人が、軍服のやうなカーキ色の詰襟の服を着て、頭は丸坊主で、眼鏡も野暮な形のロイド眼鏡で、さうして顔色は悪く、無精鬚を生やし、ほとんど別人の感じであつた。

「おしやれな人」だった過去との落差を示しつつ語られる細田氏の服装と髪型は、「丸刈頭に国民服」で璽宇教のありがたさを大書した大旗をかついで金沢を練り歩く双葉山と呉清源を写真付きで報道する記事<sup>13</sup>を想起させる。国民服は昭和五年に定められた男子の標準服で、一見「軍服のやうな」服である。<sup>14</sup> 細田氏とともに細田家に向かう「私」の服装が「普段着の和服

に「二重廻し」であることのさりげない提示と、「けふは実に、よい日ですね。奇蹟の日です。昭和十二年十二月十二日でせう？」と敗戦後にかかわらず南京陥落を強く印象付ける日を「けふ」とする細田氏の言葉とは、細田氏の服装を戦争やかつての軍国主義に接続させる記号として機能している。細田氏の風貌について「敗戦後の帰還兵一般」あるいは「現人神」の座を降りた昭和天皇その人の戯画化」とする菅聡子の指摘が想起される。「満洲は当分最も安全らしいです、勤め口はいくらでもあるやうですし、それにお酒もずぶんとたくさんあるといふ事です」と「私」を満洲に誘った「大戦がはじまつて」からの細田氏の言葉は、満洲国のイメージとして用いられた「民族協和」や「王道楽土<sup>16</sup>」といった日本帝国主義に用いられた物語への積極的な参入を表しており、戦争を美化する「愛国悲歌」を売っていた「大戦のまえ」との連続性によって敗戦前の細田氏を立ち上げていよう。細田氏は、敗戦後の世の中において忌まわしいものとされ葬り去られようとしているかつての物語を「狂気・「不潔なたはごと」とされる物語として生き続ける人物としてまず前景化されているのだ。先に指摘した細田氏の過去と現在の落差はこうした連続性に結びついており、細田氏と「私」の服装はそれぞれが属する世界／物語の違いを示す指標となっ

ている。

「不潔なたはごと」とされる細田氏の物語は、「私」に自分とともに手を洗い、「うがひ」をするよう促し、「握手!」「接吻!」を命じた後、次のように語られる。

おどろいてはいけませんよ。私たち三人の生みの母は、実は私のうちの女房であつたのです。うちの女房は、戸籍のはうでは、三十四歳といふ事になつてゐますが、それはこの世の仮の年齢で、実は、何百歳だかわからぬのです。ずっとずっと昔から、同じ若さを保つて、この日本の移り変りを、黙つて眺めてゐたといふわけです。それがこの終戦後の、日本はじまつて以来の大混乱の姿を見て、もはや黙すべからずと、かれの本性を私に打ち明け、また私の兄弟とを指摘して兄弟三人、力を合せて日本を救へ、他の男は皆だめだと言つたのです。私たちの母の説に依れば、百年ほど前から既に世界は、男性衰微の時代にはひつてゐるのださうでして、肉体的にも精神的にも、男性の疲労がはじまり、もう何をやつても、ろくな仕事が出来ない劣等の種族になりつつあるのださうで、これからはすべて男性の仕事は、女性がかはつてやるべき時なのださうです。女房

が、いや、母が、私にその事を打ち明けてくれたのは、満洲から引揚げの船中に於いてでありました(中略)女房はにこにこ笑ひまして、実は、と言ひ、男性衰微時代が百年前からはじまつてゐる事、これからはすべて女性の力にすぎらなければ世の中が自滅するだらうといふ事、その女性のかしらは私自身で、私は実は女神だといふ事、男の子が三人あつて、この三人の子だけは、女神のおかげで衰弱せず、これからも女性に隷属する事なく、男性と女性の融和を図り、以て文化日本の建設を立派に成功せしむる大人物の筈である事、だからあなたも、元氣を出して、日本に帰つたら、二人の兄弟と力を合せて、女神の子たる真価を發揮するように心掛けるべきです、とここにはじめて、いつさいの秘密が語り明かされたといふわけなのです。

「女神」から告げられた「秘密」すなわち託宣として語られる右の言説は、手や口を洗う日本の伝統文化に由来する清めを思わせる行為を前に置くことで宗教色を帯び、「女神」の子である細田氏と「私」と「力を合せて日本を救へ」とする一節は、神が世直しのため双葉山や呉清源を天照大神の化身である自分のもとに使わしたという璽光尊のお告げを想起させる。「男性

と女性の融和」を図り「文化日本の建設」を成功させるとの一節には、奥出が「戦争にみた男性論理の不毛の反省と今後は融和する男女の世界が必要、という理論は作者の願う世界」と指摘し、菅が「一見、同時代の『民主主義』言説を敷衍した、あるいはそれへの同調」と指摘したように、当時「流行語」になっていた「男女同権」「男女平等」論を見ることができると。つまり、細田氏が語る「女神」の託宣は、同時代に流行し話題となった出来事や思想を寄せ集めて一つの物語となすキメラとして提示されているのである。

キメラ chimera (キマイラとも) はギリシア神話に出てくる架空の動物で、胴体がヤギ、頭がライオン、尻尾が蛇で、口から火炎を吐く。「16世紀以来、この名は空想の産物一般、ひいては根拠のない空論の代名詞となった」と『図説ギリシア・ローマ神話文化事典』(原書房、平九・八)にあるように、英語の chimera には妄想や幻想の意味がある。細田氏が語る「女神」の託宣を聞いた「私」が細田氏を「まぎれもない狂人である」とする所以である。とはいえ、キメラとして、すなわち同時代に流行し話題となった出来事や思想、儀礼の寄せ集めである「女神」の託宣は、単純な寄せ集めではなくパロディ化されている。

マーガレット・ローズによると、文学テクストにおけるパロ

デイの「滑稽な効果」は多くの場合「ある特定のテキストに対して読者の期待を喚起し、そのあとテキストを歪曲することでそうした期待をばぐらかしてしまふことから引き出される」ため、「パロディストは、彼の風刺の対象は一般読者の一部の者に知られているものとあらかじめ仮定していなければならぬ<sup>(18)</sup>」。靈光尊や「男女同権」・「男女平等」論、日本の伝統文化の清め、欧米の挨拶としての接吻や握手といった、同時代の読者なら知っていると思われるテキストを歪曲する細田氏の「女神」の託宣ディスクールは、パロディの定義に合致している。靈光尊のお告げを思わせる言説に、同時代に流行した「男女同権」・「男女平等」論を結び付けること自体が靈光尊のパロディなのだが、パロディはこの言説の隅々にまで行き渡っている。引き揚げ船の中の「女のひと全部が、男のひとは例外なく痩せて半病人のやうになつてゐるのに、自信満々の勢ひを示している」とし、男性を「もう何をやつても、ろくな仕事が出来ない劣等の種族」として「これからはすべて男性の仕事は、女性がかはつてやるべき時」との言説は、それまでの男性中心主義社会の反転といえ、同時代の「民主主義」言説に同調する言説との併存によって「男女同権」・「男女平等」論のパロディとなっている。「女神」の託宣を伝えるための儀式として示される、

日本の伝統文化に由来する手や口を洗う清めもまた、「うがひ」となることで本来の形からずらされたうえに「握手!」「接吻!」と軍隊の号令のように表現されて本来の形からずらされた欧米の儀礼に接続されており、儀式そのもののパロディといえよう。本来の形から滑稽な形にずらされた日本の儀礼に、号令化された西欧の儀礼が結び付く儀式が端的に示すように、ここには敗戦時の日本における権力構造へのアイロニーや、新たな権力によって配給された「男女同権」・「男女平等」を単純には受け入れない批判性が靈光尊に結びつきながら滑稽に表現されている。靈光尊もまた、敗戦によって神すなわち絶対者を名乗った存在であった。靈光尊と「男女同権」・「男女平等」が結びつく「女神」の託宣は、敗戦によって出現した権力に向けられたアイロニーとなることでそれを無批判に受け入れる者に向けたアイロニーとなっている。先述の通り、細田氏の服装は靈光尊信徒・双葉山を想起させることによって敗戦後の現在にあつて忌まわしいものとされる靈光尊と軍国主義とを結び付けていた。靈光尊は、敗戦後の現在において忌まわしいとされる物語と敗戦後の権力とを結び付けるメタファーとしてパロディ化されているのである。ところで「私」は、靈光尊信徒のパロディである細田氏を「狂人」と見なし、自らの「正常」な世界

とは異なるものとして細田氏を位置付けていた。「私」の動揺は、こうした見方の問いとして表れているのである。

#### 四、「狂人」と繋がる「正常」さ

細田家で対面した細田氏の妻にすこしも「狂信者らしい影が無い」のを見た「私」は、細田氏が部屋を出るとすぐに次のように妻にたずねる。

「いつから、あんなになつたのですか？」

「え？」

と、私の質問の意味がわからないような目つきで、無心らしく反問する。

私のはうで少しあわて気味になり、

「あの、細田さん、すこし興奮していらつしやるやうですけど。」

「はあ、さうでせうかしら。」

と言つて笑つた。

「大丈夫なんですか？」

「いつも、おどけた事ばかり言つて、……」

平然たるものである。

この女は、夫の発狂に気附いてゐないのだらうか。私は頗る戸惑つた。

細田氏の発狂した時期を「いつから、あんなになつたのですか？」という言い方で問う「私」の言葉に現れるのは、「あんな」と言えばその意味する内容が、周囲の人間を困らせる「狂人」的言動であることが、自分と同様に「正常」な細田氏の妻には分かるはずという確信である。ところが、細田氏の妻は細田氏の言動を問題視すなわち「狂人」視しておらず、それどころか直後「電灯のスイッチ」がひねられて明るく照らし出される「小綺麗な整頓」された、とても「狂人の住んでゐる部屋」とは思えない部屋の「幸福な家庭の匂ひ」は、「私」の確信の足場である「正常」と「狂人」を区分する枠組みをつき崩す。自分と同じ「正常」なはずの細田氏の妻は、細田氏の言動を「狂人」視せず、細田氏と「幸福な家庭」に住まっている。細田氏の妻はその「正常」さによつて、「私」の属性である「正常」と細田氏の属性である「狂人」とを繋げているといえよう。細田氏の妻によつて「私」が属する「正常」な世界は、細田氏が属する「狂人」の世界と間接的に繋がっている。つまりその境界は

曖昧であることが示されるのだ。「正常」と「狂人」の境界が曖昧であるというメッセージの反復は、帰宅後、「家のもの」つまり「私」とともに「正常」な生活を営む「私」の妻が、やはり細田氏を問題視せず「お母さんだの、女神だのと言われて、大事にされて」と細田氏の「幸福な家庭」を羨む言動として示され、メッセージの強度となつてゐる。見逃せないのは、二人の妻の言動が引き起こす動揺が示すように、「私」にとつて細田氏は「狂人」であり、自分とは異なる世界に住まう人物として最後まで区分されていることである。

二つの異なる世界が区別されながらも繋がっているという枠組みは、本テクスト発表の二ヶ月後に同じく「日本小説」に掲載された「フォスフォオレスセンス」にも見られる。「現実家」と「夢想家」の区別が「錯雑」であるように、眠りの中の夢と現実とは本質的な差異はあるが繋がっていることを、夢の国で流した涙がこの現実につながっていることを例に示す箇所には、「私」が属する「正常」と細田氏が属する「狂人」が区分されながらも細田氏の妻の「正常」さによって繋がっているのと同じ構造が見られる。現実と夢、「正常」と「狂人」は、親和性のある対置である。「フォスフォオレスセンス」において「夢想家」は「嘲笑と軽蔑的」とされて「現実家」の劣位に置か

れるように、「狂人」もまた「正常」な「私」によって「あさましい不潔なはごと」をわめく人間として劣位におかれてゐる。「正常」と「狂人」を繋ぎ、「正常」が示す価値観を転倒させる細田氏の「幸福な家庭」は、幸福は「正常」によつてのみもたらされるものではないという「正常」なるものへのアイロニーといえよう。それは「正常」な人間として「狂人」・細田氏に同情する「私」へのアイロニーであり、「狂人」を「狂人」として区分する「正常」なるものへの問いである。「正常」と「狂人」が区別されつつも繋がっている枠組みにおいて、「狂人」は「正常」とは全く無関係なものとしては位置づけられてはいない。二人の妻の「正常」さによつて「狂人」の世界と「正常」の世界が繋がっている枠組みが示すのは、「正常」の中にある、「狂人」と繋がりを何かの存在である。

細田氏を「狂人」と見なす「私」は、聖光尊やその信徒に冷ややかな目を向けた同時代の言説そのものと言えよう。しかし「正常」と「狂人」を区別しつつも繋げる本テクストにおいて、聖光尊やその信徒は批判の対象でありながら、批判する側と無関係なものとなれない両面性をもつて扱われている。

「聖光尊とかいふひとの騒ぎ」と「やや似た事件」として物語全体を「聖光尊とかいふひとの騒ぎ」のパロディとする本テ

クストは、細田氏を「狂人」と見なしたうえで同情する立場に立ちながらも、最終的にはその立場自体を崩壊させられる。「私」を語り手とする形式によって、璽光尊やその信徒に冷ややかな眼差しを向けた同時代の言説のパロディとなっている。細田氏を「狂気」と見なし自らを「正常」とする枠組みが最後に二人の妻たちによって突き崩される物語内容は、璽光尊やその信徒を「狂人」とし自らを「正常」とする読者には自らの風刺となり得る。なぜなら敗戦後の現在において忌まわしいとされるかつての軍国主義と敗戦後の新しい権力やそれによってもたらされ流行語となった「男女同権」・「男女平等」とが璽光尊に結びつく本テクストにおいて、璽光尊やその信徒は、かつての、そして敗戦後の我々のパロディとして提示されているからだ。

現代において「璽光尊とかいふ人の騒ぎ」は、誰もが知っている事件とは言い難い。しかし、「狂人」と「正常」を全く異なるものとして区分する枠組みが脱構築され、「狂人」と「正常」が区別されながらも「正常」が内包する何かによって繋がっているという物語構造は、璽光尊やその信徒に冷ややかな眼差しを向けた同時代言説に向けた問いであるとともに現代においても有効なメッセージと思われる<sup>10)</sup>。そこに、本テクストの時代を超える普遍性はあるのではないだろうか。

注

- (1) 奥出健『女神』(『太宰治全作品研究事典』勉誠社、平七・二一)
- (2) 小浜逸郎「女の強さ、男の弱さ」(『健康保険』55―2、平一三・二)
- (3) 細田氏に対する二人の妻の受け取り方が、「理論の整合性の中で辛うじて、自分の実人生を確かめようとする『男性』である私をたたくのみず」という一点で「この作品は戦後の太宰の特徴を示しているとする植賀七代『女神』(『太宰治大事典』勉誠出版、平一七・二)もこの系譜に連なる。
- (4) ジェラルド・ジュネット『フィクションとディクション』(水声社、平一六・二二)
- (5) 金ヨロンは「戦後テクストの方法論的可能性」(『社会文学』40、平二六・七)において、冒頭の一文を「これの」という表現によって、その「騒ぎ」が享有されるべき記号であることが提示され、それを読み解くことで「すこし前」として設定されているテクストの時間が明らかになる」という「仕組み」を指摘している。
- (6) 津島美知子『回想の太宰治』増補改訂版(人文書院、平九・八)。初版は昭和五三年五月。
- (7) 『朝日新聞』昭和二年一月二五日(三一日の記事参照)。
- (8) 菅聡子「太宰治『女神』小論」(『太宰治研究』15、和泉書院、平一九・六)
- (9) (5)に同じ。
- (10) 「あらゆる最小の物語のなかには、すくなくとも一つの動作主体の同属ではあるが異なった(二つの属性)、および一つの属性から他の属性への移行を可能にする(変換あるいは媒介の過程)を同定することができる」(デユクロ、トドロフ『言語理論小辞典』朝日出版社、昭五〇)

(11) 『朝日クロニクル週間20世紀』65(昭和21年) (朝日新聞社、平一一・

二・四)によると、昭和二年一月に「南朝正統を継ぐ神武天皇第一一四代」を自称して、雑誌「ライフ」などに取り上げられ大ニュースとなった名古屋の洋品雑貨商・熊沢寛道をはじめ、天皇を自称する者は二〇人を超えたという。

(12) 昭和二年一月二日付「朝日新聞」の「靈光教の神秘を探る」と題したルポルタージュには「大切な看板双葉山」という大見出しの下「靈光尊が双葉山を信徒に獲得したことは靈光教にとつてヒットであるということだ。つまり双葉山の名は宣伝効果一〇〇パーセントで角界現役時代から荒行をつんで来た信仰の人、信念の人、双葉山の清純な心が魔法にとりつかれたと判断するよりほかにない」と、その宣伝効果と偉大な横綱双葉山の入信の不可解を伝えている。

(13) 「朝日新聞」(昭二・一・一五)の記事には「輝ける使徒双葉山に呉清源 旗をかついで金沢を練り歩く」という見出しが付けられている。

(14) 勅令第七二五号「国民服令」(『官報』昭一五・二・二二)。  
 (15) 『近代日本総年表』第四版(岩波書店、平一三・一一)によると、南京陥落は二月二日ではなく一三日だが、二日付「読売新聞」に満洲国國務院の中に「國家の象徴」として飾られた、洋画家・岡田三郎助の「民族共和国」には、左側に「モンゴル人・朝鮮人・日本人・満洲人・漢人」の女性を描くことで「五族協和」が示され、右側の「農民・漁師の男性が持つ豊かな収穫物」を通じて「王道樂土」が表現されている。この絵は日米戦開戦後の昭和十七年の満洲国建国十周年慶祝式典を記念して発行された切手や絵はがき等に使用され、満洲国のビジュアル・イメージとして戦略的に用いられた。(貴志俊彦『満洲国のビジュアル・メディア』吉川弘文館、平成二二・六) 細田氏の言葉に現れる安全で豊かな満洲国は、この絵が示すイメージそのものであ

る。

(17) 川崎賢子「占領とセクシュアリティ」(『環』22、平一七年・七)

(18) マーガレット・ローズ「パロディの定義」(『パロディのしくみ』風書房、平元・七)

(19) 例えば「オウム真理教という『ものごと』を純粋な他人事として、理解したい奇形なものとして対岸から双眼鏡で眺めるだけでは、私たちはどこにも行けないんじゃないかということだ。たとえそう考えることがいささかの不快さを伴うとしても、自分というシステム内に、あるいは自分を含むシステム内に、ある程度含まれているかもしれないものとして、その『ものごと』を検証していくことが大事なのではあるまいか」(『アンダーグラウンド』講談社、平九・二三) という村上春樹の問題意識は、本テクストの物語構造そのものであり、「私」の動揺を「不快」という言葉で示していると思われる。

付記 引用は全て『太宰治全集』10(平一一・一、筑摩書房)に拠る。引用に際し、旧字は新字に改めた。